



2000年2月のぼかぼか陽気のある日、黄河の砂州にある伏羲河村の村人達が、くずれ落ちた窑洞の前に集まっていました。老人達がカルタをしており、新しい衣装の女の子達何人が取り囲んで見えています。私がやってきたので、すぐに彼女達の関心が私に集まりました。しかし私が写真を撮ろうと写真機を構えると、背筋を伸ばして、妙に取り澄ましてしまいます。自然で生き生きとした感情が溢れている写真が本当は一番いいのですけれど。

私がカメラのレンズを覗きながら写真に撮りたい対象を探し求めていると、杖を突いた女の子が塀に寄りかかって座って居るのに気が付きました。ずうっと頭を垂れて、しかもどんどん深く俯



2006年春節の翻翻



翻翻とお祖父さん

いて行きます。この子の名前は郭翻琴といい、みんな彼女を翻翻と呼んでいるそうです。杖を突き頭を深く垂れた翻翻は、私の心の中で気にかかる存在になりました。

次の年の8月、私は女の子達にアンケートを書いてもらおうと伏羲河村にやってきました。辛い気持ちにさせられたのは翻翻の楽しみは“丢沙包”(注1)だけということです。“丢沙包”は彼女が他の子どもたちと一緒に遊ぶことの出来る唯一の遊びなのです。将来の理想について、“大きくなったら仕事をする”と書きました。小さい頃から体が不自由なこの子は大きくなったら正常な人と同じように仕事をし、自分の力で生きることが出来るようになるとひたすら願っているのです。が、これは現実にはありえない辛い夢物語でしかあり得ません。

ある時、そろそろ夕方になろうかという頃、私は伏羲河村に着き、楽しそうな笑い声につられて学校にやって来ますと、狭い校庭で子供たちが手を繋いで“老鹰捉小鸡”(注2)という遊びをしていました。黄色い服の少女が壁に寄りかかっていたのですが、(この遊びを)羨ましそうに見ている彼女の眼差しに私は深く打たれました。翻翻でした。翻翻はこのような遊びにはいけません参加することは出来ないのです。

伏羲河村に来る都度、私はいつも翻翻の写真を



翻翻と弟

撮るのですが、写真を撮ろうとすると杖を自分の後ろに隠そうとしますので、私は自分の前に抱えるようにといます。いつか分からないけど、心優しい人がこの可愛いそして可哀相な女の子の写真を見て、彼女を助ける方法を考えてくれるかもしれないと思っていますのです。実はこの種の矯正手術は町に行けば難しい手術ではありませんし、費用もそれほど高くはないのです。しかし、この地の人にとっては、翻翻の家にとっては手が届かない金額でどうしようもないことなのです。

その後再び伏羲河村にやって来たときは私が写真を撮り続けた何人かの女の子達は皆、郷の学校に行って家には帰っておらず(注3)、家に居たのは翻翻だけでした。本来なら彼女も四年生になっているはずですが、山を越え谷を越えて40里あまりの道を歩いて郷の小学校に通うのは、翻翻にとってはやっぱりどうしようもないことなのです。(田井訳)

注1 2人の子どもAとBが8～10mの距離を置いて向かい合い、もう1人の子どもCが真ん中に立つ。両サイドの子どもAとBは真ん中に立つ子どもCに砂袋を投げつける。Cが上手くよけたらA又はBは砂袋を拾って更にCに投げ、Cに当たったら位置を変える。翻翻は足が悪いがA又はBとして砂袋を投げることはできる

注2 日本の子供たちの遊びの“子とろ、子とろ”と同じ遊び。

注3 4年生になると宿舎のある遠方の学校で勉強し、週末に自宅に戻る。